

ヴィクトリア朝の服飾表現にみる女性の自立と身体観に関する研究

Victorian Women's Independence and their Body Images Shown through their Selecting Costumes

佐々井 啓^{*1+}, 坂井 妙子^{*2+}, 好田 由佳^{*3+}, 山村 明子^{*4+}, 米今 由希子^{*5+}
Kei Sasai^{*1+}, Taeko Sakai^{*2+}, Yuka Koda^{*3+}, Akiko Yamamura^{*4+}, and Yukiko Komeima^{*5+}

*1 日本女子大学家政学部 東京都文京区目白台 2-8-1

Faculty of Human Sciences and Design, Japan Women's University,
2-8-1, Mejirodai Bunkyo-ku, Tokyo, Japan

*2 日本女子大学人間社会学部

Faculty of Integrated Arts and Social Sciences Humanities, Japan Women's University,

*3 堺女子短期大学美容生活文化学科

Department of Beauty and Life Culture, Sakai Junior College

*4 東京家政学院大学現代生活学部

Faculty of Contemporary Human Life Science, Tokyo Kasei Gakuin University

*5 明星大学教育学部

School of Education, Meisei University

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract: The purpose of this project is to clarify Victorian women's life and their body images by examining contemporary women's magazines. Their importance has been widely recognized by researchers of historical dresses, but their main focuses have been on the styles and colours of fashionable dresses and dress accessories. Re-reading Victorian women's magazines and re-focusing on the issues such as women's actual life styles and their way of thinking give us a new understanding of Victorian culture.

目的 これまで 19 世紀の服飾研究は、主としてフランスの遺品やモード誌の分析に依るところが多かった。モードを牽引したフランスの研究は重要であるが、ヨーロッパの他の国々においては、必ずしもフランスの追随にとどまるのではなく、独自の服飾文化を形成し、それぞれの価値観を生み出していることが指摘されている。そこで、本研究は、イギリス・ヴィクトリア朝の社会に注目し、女子教育の普及と女性の自立に対する意識の高揚が女性雑誌の普及と関連があることを明らかにする。すなわち、女性雑誌を網羅的に研究して記事を分析し、文献情報を確立することを目指すとともに、これまで概説書等では充分に明らかにされていなかったヴィクトリア朝の女性の自立と身体観に関する実態を、演劇、キャラクター、アウトド

*1) sasai@fc.jwu.ac.jp

アフアッション、レジャースポーツ、ジャポニズムの観点から明らかにする。

方法 19世紀に刊行されたイギリスの女性雑誌を調査し、それらの記事を分析して、服飾表現を通して女性の生き方を明らかにする。本年度は、文化女子大学図書館および、国内の図書館に所蔵されている雑誌を取り上げ、その概略を調べるとともに、最終目的である女性の自立と身体観についての資料を収集した。

結果 今回、調査を行った女性雑誌の特徴を以下に挙げる。

① 「レディズ・キャビネット・オブ・ファッション」*The Ladies' Cabinet of Fashion* (図1)

同誌は 1832 年に創刊、1870 年まで続いた高級ファッション誌である。マーガレット・ビーサムが著書、『彼女自身の雑誌』[1]で指摘するように、構成は「すでに確立したパターンを踏襲した」。つまり、カラーのファッションプレートとその解説をメインに、ロンドンやパリの最新ファッションの紹介、ロマンティックなフィクションと詩、家事に関するアドバイス、装飾小物の作り方などが掲載されている。

特筆すべきは、書評欄にあるように思う。イギリスを代表する小説家の一人、ジョージ・エリオットの代表作、『アダム・ビード』(1859)の紹介記事がいち早く掲載され(1859 年号 271 頁)、1863 年には、骨相学の一般向け研究書『皇太子と皇太子妃の骨相学的スケッチ』(*Phrenological Sketches of the Prince and Princess of Wales*, 1863)の内容が詳細に語られている(222 頁)。骨相学とは、骨の形態から人の性格、気質を類推する学問で、19 世紀には広くヨーロッパで流行した。本著が出版された 1863 年は皇太子(後のエドワード七世)とデンマークの王女、アレグザンドラが結婚した年であり、話題のカップルの人相を骨相学的に研究するという主旨の書物である。

ファッション関係の著書の紹介にも特徴が感じられる。たとえば、63 年号には『ドレスの色に関する淑女のためのマニュアル』(*A Manual for Ladies, on Colour in Dress*)が紹介されている (50-51 頁)。これはドレスの色の顔映りに関する指南本である。顔色に合った、正しい色合いのドレスを選ぶことで、「センスの良さ」と趣味の良さを示すことの重要性を訴えている。総じて、同誌は洗練されたセンスと高い教養、知的興味を持つ読者をターゲットにしていたことが窺える。

② 「ガールズ・オウン・ペーパー」*The Girl's Own Paper* (図2)

この雑誌は、宗教叢書協会が、「おもしろくてためになる」質の高い読み物を提供するために創刊した雑誌で、若者たちの教化を目的とし、しかも売り上げが海外へのミッション活動の資金源となった[2]。したがって、読者のニーズをキャッチし、娯楽性を取り入れながらも、ヴィクトリア社会のモラルを逸脱しない雑誌づくりに努めねばならなかった。雑誌の形態は、創刊時には、22 cm×28cm、三段組み、16 ページであった。週1ペニーの少女向け週刊誌として販売され、19 世紀末には購買数が 250 万部を超え、女性雑誌最大のシェアを記録した。ガールという言葉が雑誌の名称に用いられているが、読者層は、少女から未婚の女性まで、幅広い年齢層から支持され、労働者階級から上・中・下・中産階級までをターゲットとした。取り上げられた内容は、ドレス、家事、美容と健康、小説、教育、労働と多岐にわたり、労働者階級の少女がやりくりして衣服購入をする方法から、大学進学に関する内容まで幅広い読者層を意識した紙面づくりをしているのが大きな特徴である。ドレスに関するコーナーでは、健康的な衣服について紹介する記事が創刊後すぐに登場する(*The Girl's Own Paper*, 1880.1.10)。少女の健康に関するコメントも多数掲載され、例えば、戸外での健康的な運動が血を浄化すると奨励し

(1880.3.20)、健康的な娯楽としてスケートを紹介し(1880.1.10)、新しく登場したローンテニスのやり方を指南する(1882.10.7)。衣服改良への関心も高く、「下着の改良」という記事が掲載されている(1887.10.7)。ホームメイドの衣服として、海水着を取り上げる(1887.7.30)等、少女の健康に関心を寄せ、スポーツを奨励する新しい記事を積極的に取り入れた雑誌として位置づけられる。『クイーン』が上層部の中産階級を読者層とした女性雑誌であったのに対して、幅広い女性層の支持を狙った『ガールズ・OWN・ペーパー』は、最新流行のファッションだけではなく、スポーツをするためのホームメイドのファッションまでを指南する情報発信基地的な役割を果たしたといえる。

③ 「レディズ・コンパニオン」*Ladies' Companion at home and abroad* (図3)

ラウドン夫人(Mrs. Jane Loudon)の編集により、同誌は1849年12月29日に創刊された、月刊誌である。発行元は1851.7.1.号までがLondon: Bradbury and Evans, 11, Bouverie Street. その後、London: Rogerson and Co., 246, Strand.に移っている。1849.12.29.号から1851.7.1.号まではA4版サイズ、以降はB5版サイズに変わっている。価格は1849.12.29.号から1850.12.28.号までは1冊3ペンス、その後、1冊1シリングで販売されていた。毎号56ページ。

編集者のラウドン夫人は読者である家庭の女性たちに、娯楽的な要素だけではなく、精神的な発達を促す記事を提供することを目的としていた。副題が「国内外」とされていることも、家庭の中の楽しみ以外にも女性の目を向けさせることを意図していた。その為、本誌に、掲載されている内容は小説、詩、料理、手芸記事、ファッション記事、園芸の連載といった記事のほかに、女性の意識を啓発する教育的な内容も散見される。1851.8.1.号以降は彩色がなされたファッションプレートが毎号掲載されている。1867年発行のものまでが文化女子大学図書館には収蔵されている。

また、同図書館では“*The Lady's Companion A Home Journal for women and Girls.*(1898.12.~1899.5.)”も所蔵している。この時期は週刊でサイズはA4版大、1冊1シリング、出版元はR. S. Cartwright, 8, Johnson's court, Fleet Street, E.C. である。内容として50・60年代の物よりも家事、美容と健康、裁縫の指南などが多く掲載されている。この編集傾向の変化は、「女性と少女向けの家庭用雑誌」と副題が改題されていることから窺われる。「子供の衣服の作り方」や「無料パターンを使った洋服づくり」など具体的な情報を掲載する一方、50・60年代の華やかな色彩のファッション画は登場していない。

④ 「クイーン」*The Queen* (図4)

The Queen は1861年にSamuel Beetonによって創刊された週刊誌で、1970年まで刊行されている。1861年9月7日創刊で、創刊号の価格は6ペンス、16ページでサプリメントがついており、サイズはA3サイズである。ビートンが編集に関わっていたのは1861年から1863年までの3年間で、副題は“*An Illustrated Journal & Review*”であったが、その後“*Lady's Newspaper and court chronicle*”と改題されている。出版当初にビートンが掲げた編集方針は、女性のための雑誌であるから家庭(home)に焦点をあてた雑誌を作るというものであった。内容は小説、料理、手芸、ファッション、社交界の出来事などについては決まって毎号掲載され、洗練されたイラスト付のファッション記事も多数みられる。また、彩色されたファッション画も初期は隔号で付属されている。さらにクイーンを特徴付けるものとして、趣味的な娯楽記事だけではなく国内外のニュース記事も多く掲載されていることがあげられる。鉄道事故の記事(1861.9.7)や大型客船グレート・イースタン号の遭難の記事(1861.9.28)など事故の記事や、アメリカの南北戦争に言及した記事(1861.11.23)といった海外の記事など、毎週、国内外のニュース記事が掲載されている。また、広告が多く掲載されている事も特徴で、広告を資料として扱う上でも資料的価値は高いと考えられる。クイーン

ン誌の特徴としては他誌と比べて価格が高いため、比較的上の階層の女性を対象としていたと考えられる。また、誌面がA3サイズと大きめであることも特徴で、大きな誌面1面を使ったイラストなどもしばしば掲載されており、他誌に比べると見ごたえのあるものだったのではないかと考えられる。サプリメントは刺繍の図案であったり、ファッション画であったり、その時々で内容は様々なものが付属されている。

以上のように、今回は代表的な女性雑誌を取り上げて、その編集方針や対象となる女性たち、記事の内容について概観した。今後、女性たちのさまざまな活動の記事を通して、女性の自立と身体観の確立に関して、女性雑誌の果たした役割を明らかにしていきたい。

文献

1. Beetham, Margaret, *Magazines of Her Own*, Routledge, 2006 p.40
2. 川端有子『ガールズ・オウン・ペーパー 日本語解説』、ユーレカ・プレス、2006、4頁



図1 レディズ・キャビネット・オブファッション 1859
 図2 ガールズ・オウン・ペーパー
 1) 1巻1号 Dec.29,1849 2) テニス Oct. 14, 1882

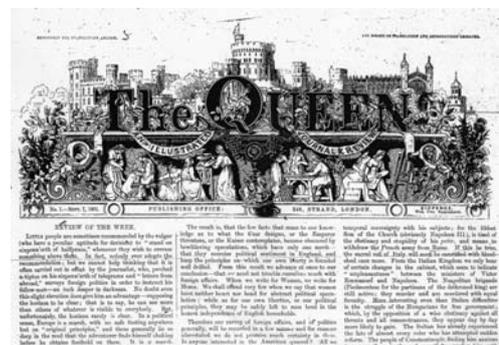


図3 レディズ・コンパニオン 1巻1号 Jan. 3. 1880
 1) タイトル 2) ファッションページ
 図4 クイーン Sep. 7, 1861
 タイトル